

体の中を風が吹く

佐多利

体の中を風が吹く

佐多 稲子



講談社

体の中を風が吹く

昭和32年 4月10日 第1刷発行 ㊦ 円 280
昭和32年 6月15日 第4刷発行

著 者 佐 多 稲 子

東京都文京区音羽町 3-19
発 行 者 野 間 省 一

東京都文京区音羽町 3-19
印 刷 所 豊国印刷株式会社
代表者 渋谷龍吉

発行所 東京都文京区 株式会社 大日本雄弁会講談社
音羽町 3-19

落丁本・乱丁本はお取りかえいたします。 (毛利製本)

PRINTED IN JAPAN

目

次

街の音……………七

秋の雨……………三

家の中……………六

夜のあかり……………六

空が晴れて……………二五

落葉が舞う……………一四〇

小さな花 二六

夜道の影 二七

赤い木の実 二四

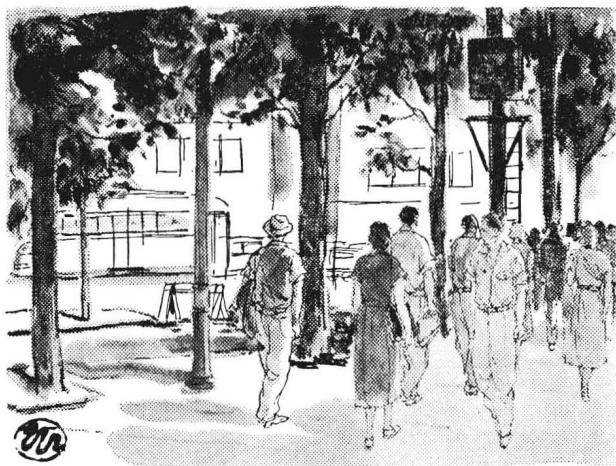
霜　　柱 二八

葉ぼたん 二六

寒つばき 二八

裝幀向井潤吉

体の中を風が吹く



街の音

日曜以外なら、それは毎日同じなのだ。五時を過ぎた日比谷交差点では、有楽町へ向つて人が広い幅になつて渡つてゆく。そして今日も、薄黄ろい陽ざしの中を、ゴー・ストップでひと区切りされて渡るおびたらしい人の流れ。その上を、台風をおもわせる強い風が、ざわつ、ざわつと大きくふくれて吹き通つていた。堀ばたの柳が、疲れた色で荒つぽくなびている。自動車の警笛がいどむように空いつばいに叫び上げ、日活会館の建物が知らん顔で見おろしている。そして映画の絵看板さえ音のない騒音。

だから人々の足音は聞えない。肩が触れ、前とうしろにくつついてゆく人の足音、それは沈

んだまま音にならない。それは、ひとりひとり、自分だけ知っている。

村松章子のローヒールの足音も、今日はそこに混じっている。が、彼女は自分の足音だつて聞いているのだ。まだ半そでのワンピースだが色だけはもう黒を着ていた。すそのせまい黒の服が、神経のおつた身体の線を見せている。無造作なショートカットの髪を服と同じ色のベレエで押えている。仕事カバンを抱え、疲れて少しあおい顔をしている。無愛想な表情で、だから筋のおつた細めの鼻が冷めたく見える。

そんな章子の姿は人目には仕事を持つてものおじもしない確かさに見えた。三十を越した年齢などはかき消されて、いわばさつそうしてさえ見えた。今日彼女は、雑誌の記事を取るために、今まで家庭裁判所で、調べごとをしていたのだ。その調べた問題もうつとうしい。離婚の数や内容、子どもの養育費の、夫側の決定不履行。章子にとつて事新しい結果でもなかったし、だから、ただそのあとの気分、うつどうしい影となつて映っているばかりだ。

五時半から六時までに銀座で正木省吾とあう約束だから、彼女はそこへ向つて歩いている。省吾の友人の、安川夫妻が一緒のはずだ。あるいはその安川たちも、今ごろ日比谷の交差点を渡つたにちがいない。部屋を探している安川たちは、心を弾ませて歩いていたのかもしれない。

章子は埋立てのはじまつてごたごたした数寄屋橋をすぎて、四丁目のオリンピックピックへ急いだ。店へ入つて見まわしたが、正木省吾はまだ来ていない。安川たちの顔は章子は知らないのだ。

「コーヒーちようだい」

ベレエをとつてばらつと髪を振つた。

「冷めたいのにいたしますか。ホットにいたし……」

「あ、あつたかいのをね」

聞かれる途中で言つて、カバンの中から煙草をとり出した。一服すうつと吸つて、身体をイスにもたせたとき、正木の姿を入口に見つけた。章子はその姿勢のまま、黙つて軽く手を上げて合図した。

「早かつたね」

正木は微笑して寄つて来た。気が優しいから彼の微笑は内氣に見える。グレーの半そでシャツをきて、男にしては白い細い腕をしていた。

「今、来たところよ。その人たち、まだ？」

「そうだな」

と、正木は店の中を見まわした。

「なんだ。こつちが先きか」

正木は自分もコーヒーを注文してそう言う。章子は正木の前に煙草の箱を押してやりながら、自分たちの方が先きで、ああよかつたとおもうのだ。だがそれは黙っている。

「今日、その部屋を見にゆくこと、君の隣りの家じや、知つてゐるの」

「知つてゐるわ」

「その家の人たち、いい人かい」

「善良な家庭よ」

人のために部屋を世話したつて、という気だから、章子は義務的に答える。それに、正木の前で、若い夫婦を見るなんて、今の章子は気が重いばかりだ。が、正木の方はそんな章子の感情はわかっていないらしい。すると章子は自分の痛いところにわざとさわつてみたいように言い出した。

「安川さんの奥さんつて、若い人？ 若いんでしょね」

「そうだよ」

ちらつと、正木は章子を見た。

「まるで、子どもみたいな夫婦さ」

正木は章子の気持を軽くなだめたつもりだった。章子はわざと知らん顔で視線を外していき、

「いい部屋らしいね。この前の話だと。僕も見たいんだけど」

「ひとの部屋なんか見たつてしょうがないわ」

「そうでもないさ」

正木もちよつと気を悪くした表情になつて、煙草のけむりに目をほそめた。章子は自分の家に正木を決して呼ぼうとしない。今日だつて、章子の隣家に安川が部屋を見にゆくのだつて、正木は連れてゆかない約束なのだ。正木にも章子が自分の家には、彼を連れてゆきたがらない

気持はわかつている。

「まあ、いいよ」

何となく正木は言つた。

「罪な話よ」

と、章子はぼそつと言つた。

「どうして？」

「どうして、つて……」

「だから、いいじゃないか。相手は喜んでゐるんだ」

「そりやそうでしょうけど」

部屋が無いことぐらいなら、何とでもなる、と、そんなおもいを章子は胸の中でつぶやいてゐる。

「私のこと、知つてゐるの？ その安川さんつて人たち」

「うん」

と、正木はあいまいに答えた。章子は先手に出ようと、

「まあ、言う必要もないわね」

正木はあきらかに詰まつて、不きげんな顔をした。追込みをかけられたやうで不愉快なのだ。正木は單純に、友達のために役に立つのを喜んでゐた。章子と自分の關係は安川には言つてゐない。安川夫婦が章子の隣りに住むようになれば、いや、もつと早く今日にも、章子の境

遇は知れてしまう。

そんな二人の中に、安川の明るい声が入つて来た。

「や、どうも、おそくなつちやつて」

章子は素早く、安川啓太郎のそばに、その若い妻を見ていた。

安川夫妻が並んであいさつするとき、この二人の背丈は同じに見えた。

「千枝子です」

と、安川啓太郎は初対面の章子に、自分と一緒に妻を紹介したが、何となくちよつと照れる、というような表情をした。濃い肩が少し下り気味で、常に微笑をふくんでいるような目だ。それで人が好く見える。が、あごのあたりの線は太い。

「どうぞよろしく」

かざり気なく千枝子は夫に紹介されたあとに腰を曲げた。丸い口元など優しい。が表情がさつぱりしていて、女同士の章子には、それが気易かつた。格子じまの木綿のブラウスに紺のスカートで、どこでも見られる職業婦人の印象が、銀座などを歩いていけば、彼女が家庭を持つてみそ汁を作っているとは気づかれないかもしれない。坊や刈りなどといわれる短くカットした髪には、ウェーブもなかつた。

「今度はほんとに大助りなんですよ」

と安川はもう、その部屋を見ない前から、借りると決めているらしい。

「お気に入ればいいんですけど」

と、章子は形どおりに言い、給仕が待っているのですその方を気にした。

「何をお飲みになる？」

「あ」

と、安川はそこで気がついて正木と章子のコーヒーを見た。

「じゃ、僕もコーヒーを。君は？」

と、千枝子に聞く。千枝子は即座に、

「私、オレンジ・ジュース」

「かしこまりました」

給仕が引返してゆくと、正木が章子のあとをついで、

「そりやまあ、アパートなら面倒は少ないがね」

「いいや、何だつていいですよ。何しろ権利金なしで二間借りられれば、こんなありがたいことないですよ。このごろはアパートもずいぶん建っているらしいけど、新築ならやつぱり高い権利金を言うらしいですからね」

「二間つたつて、六畳と三畳ですよ」

と、章子は、安川のあんまり弾んでいるのについて自分もほほ笑んだ。

「結構ですよ。それだつてちやんと二間ですよ。何しろ現在の部屋は僕が学生時代からいるんで気はおけないけど、結婚したとき、強引に居坐つちやつたんでね。家主もあきらめていたらしいけど、今度その息子が結婚するんですよ。そいで空けてくれ、と言われちやつて」

千枝子もオレンジ・ジュースのストローを口からはずして、あけすけに言い出した。

「権利金なんて、やつぱり安くつたつて二万だ三万だつて言いますものねえ。ちよつといいと五万でしょう。それで二間あるとこなんてめつたにないですもの」

「そうだねえ」

と、正木が首を振つた。安川は自分たち全体を自ら茶化す、とてもいうように、

「いや、われわれには、二万、三万なんておいそれとなかなかまとめて出せませんよ」

「そりやア、そうですね」

章子がそれにはしんから同感を示して、

「じや出かけますか？」

「正木君、君も行つてくれるの？」

「いや、僕はちよつと……」

と、正木はちら、と章子を見ながらその場をつくらつた。

丁度そのころ、吉祥寺の山崎孝夫の家では、妻の静子が台所で夕飯の仕度をしていた。

「多美ちゃん」

と、郷里の九州なまりの残る、下に押えた呼び方で娘の名を呼んで、

「あんた、帰つたばかりで悪いけど、おぜん出してよ。今日はホラ、二階を見に来る人がある